

東日本大震災 5 周年復興フォーラム

岩手県・宮城県・福島県知事の鼎談 発言録

テーマ 「震災から 5 年の歩みと将来への展望」

司会 生島ヒロシ氏

岩手県 達増拓也知事 / 宮城県 村井嘉浩知事 / 福島県 内堀雅雄知事

【PART1 5 年間のエピソード・支援への感謝】

●岩手県知事

- ・2011 年 3 月 11 日の東日本大震災直後は岩手県にも大きな被害をもたらし、岩手県に大きな衝撃を与えた。一方、全国、世界各地から寄せられた多くの支援は、岩手県民に大きな驚きと喜びを与えてくれた。
- ・発災直後からアメリカ、イギリス、中国から緊急援助隊が岩手に派遣され、救助活動をしていただき、大いに元気付けられた。同時に世界中からお見舞いや励ましのメッセージが寄せられ、緊急物資や寄付金等たくさんのご支援をいただき、地元の底力と県外との様々な力を合わせて復興の力になるのだなと感じた。
- ・象徴的だったのは、震災廃棄物の瓦礫の処理を 3 年間で終わらせることであり、これを実現できたのも、全国各地で処理をしていただいたことが大きい。また、三陸鉄道の全線を 3 年で復旧させることができた。
- ・今もなお、岩手県だけでまだ 2 万人の方が仮設住宅で暮らしているが、地元の底力と県外のような力を合わせて復興を成し遂げていきたいと思う。

●宮城県知事

- ・まずは、震災以来 5 年間、国内外から温かい御支援をいただき、深く感謝申し上げる。
- ・被災した仙台空港は米軍の友達作戦による支援のおかげで、1 ヶ月もしない間に飛行機が離発着できるようになった。また台湾等からの寄付金により南三陸の大きな病院がオープンにこぎつけるなど、世界中の皆さまの心遣いに感謝している。
- ・震災以後、まちづくりに関しては、震災以前と同じまちをつくるのではなく、内陸に平野部があるところは内陸にまちをつくり、平野部が無いところは、沿岸部の高台にまちを作るなど、何かあっても命だけは守れるまちづくりをコンセプトに取り組んできた。
- ・おかげさまで、復興に向けた取組は、今まで蒔いた種が着実に実を結んできており、昨年 3 月には、一部運休していた JR 石巻線が、そして 5 月には JR 仙石線が全線復旧を果たしたほか、今年の年末までには JR 常磐線の浜吉田駅と相馬駅の間で運転が再開される予定であり、県内の鉄道の復旧に目途がつくことになる。
- ・道路は常磐道が整備され、三陸道が岩手に向かって延伸しているような状態である。
- ・また、まちづくりの関係では、昨年 3 月に女川町、7 月には岩沼市の玉浦西地区、11 月

には石巻市の新蛇田地区で、まち開きが宣言され、被災したまちに、にぎわいが戻ってきている。

- ・確実にハード面の整備が進んできている。これからの復興創生期間はソフトに力を入れていくことを目指している。

●福島県知事

- ・福島の現状は光と影が混じりあっているというのが現状である。明るいニュースも増えてきたが、今もなお9万人以上の方が避難生活を続けているという厳しい課題もある。今後は、影を薄めて明るい光を多くしていきたいというのが我々の思いである。
- ・そういった思いを支えてくれたのが、国内外の方々の御支援であり、非常に感謝している。4月に起きた熊本大地震については報道を見ても他人事とは思えない。福島県の方々が少しでも応援しよう、恩返ししようと様々な支援を検討している。
- ・日本のお互いを助け合う姿勢や考え方は素晴らしいと考える。皆さまのご支援に感謝をしながら、影を薄めて光を強められるような復興を進めて参りたい。

【PART2 知事が描く被災地の未来】

●岩手県知事

- ・復興とは、時間をかけて震災前に戻すことではなく、未来のあるべき姿に追いつくものでなければならず、その意味で「未来に追いつく歩み」であると考えている。
- ・岩手の場合、復興道路や復興支援道路の整備によって、今まで険しい峠などによって隔られてきた岩手沿岸の町や村、そして岩手沿岸と内陸が史上初めて実質的に一体化し、明治以来の近代化が完成するというのが我々の描いているゴールである。また、現在、JRが宮古―釜石間の鉄道の復旧作業中であり、復旧した後は三陸鉄道がその部分を引き受けることになる。完成は3年後であるが、3年後にはラグビーワールドカップが釜石市で開かれる特別な年であるため、三陸鉄道沿線を中心に三陸復興防災博覧会のようなイベントを開催し、地元の底力や様々な繋がりの中で未来を切り開く取組みを行いたいと考えている。

●宮城県知事

- ・宮城県は利便性がよく、雪も少ないこともあり、東北の経済の牽引役という大きな役割があると考えている。今後5年間の復興期間は国が財源を確保してくれるが、その先、5年後をどうするのかを考えなければならない。そのためのキーワードは民間活力の活用である。真の復興というのは、県民一人ひとりが自立して立ち上がることだと思う。その際には、民間の力を最大限活用することが必要不可欠となる。
- ・その例として、水産業では漁業権を民間に開放する水産業復興特区を活用し、この7月には、国管理空港で初となる仙台空港の民営化が実現する。民間の活力を活用し、雇用を生み出し、被災者が他県に出ていくことが無いようにするのが、今後の宮城県の大きな役割ではないかと思っている。

●福島県知事

- ・福島の未来にとって重要な数字が2つある。1つは7%、もう一つは0%である。現在、福島の面積の7%が避難区域となっている。福島にとって、この7%を0%にすることが一番重要な復興の姿である。そのためには、ただ避難区域を解除すれば良いというものではない。これまで住んでいた方が安心して、笑顔であたり前の生活を送れるかどうかであり、そこに我々の未来がかかっていると考えている。あたり前の暮らしは無くなって初めてその重要性に気付くものである。あたり前の暮らしを取り戻すことを遠い将来ではなく、近い将来に縮めていくことが、我々の重要な仕事だと考えている。

【PART3 国民に向けたメッセージ】

●岩手県知事

- ・震災の被害が大きかった沿岸部は、少子高齢化、人口減少が進んでいた地域であり、復興させても無駄ではないかという意見もあるが、国勢調査の結果、人口減少率は東日本大震災を挟んでいるが、前回より改善している。昨年の合計特殊出生率も10年ぶりに1.5となり、出生数も10年ぶりに増えている。
- ・沿岸部でも20歳代前半の若い世代の人口が増えている市町村もある。大槌町など、出生率が2.0を超え、震災前より増えているところもある。復興事業というものについて、沿岸部に住んでいる方々の底力が出ている。
- ・国内外で困っている方がいれば、今度は我々が助けられるようにしたい。そういう思いも持って復興成し遂げようとしている。

●宮城県知事

- ・我々は内に対しては復興、外に対しては風評と風化と戦っている。風評は原発事故の影響が東北全体に大きな影響を与えている。安全なものであってもなかなか手に取ってもらえないという現状がある。全国の皆さまには是非東北のものを手に取ってもらいたい。
- ・また、震災が徐々に風化してきていることを感じる。実際に東北に足を運んでいただき、今なお復興途上にある東北の状況を感じていただきたい。今後も無理のない範囲でご支援を継続していただきたい。

●福島県知事

- ・「福島プライド」というメッセージを伝えたい。「福島プライド」には2つの意味がある。1つ目は「マイナスをゼロにする」ということである。5年2か月前に失った私たちの誇りをもう一度元に戻したい。2つ目は「ゼロをプラスにする」ということである。震災前と同じ状況に戻すだけでは本当の復興にはならない。例えば再生可能エネルギーやロボット産業、新しいライフスタイル等を新たに作りあげて全国や世界に発信していくこと、新しい誇りを作り上げていくことが我々の重要な責務だと思っている。福島プライドを取り戻し、新たな福島プライドを作り上げるためには、まだ長い闘いになるが、皆さんの応援を受けながら頑張っていきたい。 以上